



## 身体障害のある在日コリアン女性のライフヒストリー：交差性における社会的抑圧

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): physical disabilities, Korean residents in Japan, life history, qualitative research, intersectionality 作成者: 宋, 知潤 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00017910">https://doi.org/10.24729/00017910</a>

# 身体障害のある在日コリアン女性のライフヒストリー：

## 交差性における社会的抑圧

宋 知 潤

大阪府立大学大学院生

### 要 旨

本研究の目的は、身体障害のある在日コリアン女性の自叙伝を基に、交差性を用いて、障害のある在日女性が経験する社会的抑圧について明らかにすることである。テキストデータを質的に分析するためにKJ法を採用した。その結果、1. 障害とエスニシティでは【属性に揺れる】など4つのカテゴリー、2. エスニシティとジェンダーでは【継承される抑圧を越えたい】など3つのカテゴリー、3. 障害とジェンダーでは【子をもつことに対する逡巡】などの7つのカテゴリーを抽出した。また4. 障害とエスニシティとジェンダーでは【マイノリティとマジョリティを併せ持った痛烈な思い】のカテゴリーが1つ得られた。金満里氏は、ポジショナリティによって位置づけられた人種、国籍、障害、女性など複数の属性に揺れながら、主体的なアイデンティティを形成していく。権力者の位置にいる自己と対峙する彼女の姿から、我々は誰もが差別者になり得る位置にいることが示唆された。

キーワード：障害、在日コリアン、ライフヒストリー、質的研究、交差性

### 1. 問題と目的

本稿では、ポリオにより全身麻痺となった、在日コリアン女性である金満里氏が1996年に発行した自叙伝『生きることのはじまり』を基に、交差性（intersectionality）を用いて、障害のある在日女性が経験する社会的抑圧や心理的葛藤について明らかにする。抑圧の概念は多岐にわたるものの、ここではYoung（1990 飯田・菊田・田村訳 2020）の「搾取、周辺化、無力化、文化帝国主義、暴力をさし、そのうちの一つでもあれば抑圧を受けていると判断する。」に依拠することとする。Youngによれば、抑圧を受けている人間はすべて、自らの才能を発展させ行使したり、自らの必要、思考、感情等を表現したりする能力に対して、何らかの制約を受けていると指摘する。

交差性の枠組みを用いて被抑圧者の経験に着目するには、ライフヒストリーの手法が有用であると考えられる。ライフヒストリー（生活史）は、特定の個人や個別の出来事を理解する個性的記述研究の視点を持ち、研究者が歴史的・社会文化的な文脈に位置づけて再構成するものである（Langness & Frank, 1981 米山・小林訳 1993）。その一手段として語りが用いられ、語られた内容の裏付けとして各種の資料や史的論証が重視される（やまだ, 2000, 2007）、個人的記録である自叙伝は、自己変革性を持ち、自分自身の言葉で、感情、行為、思想、欲求等、自己創造のプロセスを表現した物語作品であり、貴重な質的資料となる。すでに本自叙伝を生活史で分析した田中（1998）は、障害者文化の意義と可能性を説いたが、エスニシティやジェンダーの視点を課題に残している。

なお、本稿で述べる「在日」とは、在日コリアン、すなわち、朝鮮半島出身の戦前戦中に定住化した人々とその子孫をさすこととする。

## 2. 交差性

### 2.1 交差性

交差性（intersectionality）とは、1989年Kimberlé Williams Crenshawが提唱した概念であり、抑圧や差別、暴力といった問題は、ジェンダー、人種、民族、階級といった多様な要因が複合的に交差する中で起きることを強調する。背景には、1960年代後半の第二波フェミニズムが、白人中流階級女性を中心とする実践であったことから、ブラックフェミニストらによる批判が起こった。それらは1990年以降の第三波フェミニズムに引き継がれ、差異や多様性を捉える交差性概念がより受容されるようになった。

2001年アフリカのダーバンで開かれた国連主催の「人種主義、人種差別、外国人排斥および関連のある不寛容に反対する世界会議」において、「ジェンダーを含む他の差別と人種差別の複合性」が注目され、交差性、複合差別の認識が高まった。これまで「女性の困難」が単一のカテゴリーのみで捉えられていた視点に、他の要因を交差させることによって、マイノリティ女性の困難を明らかにさせる狙いをもつ。国連の人権分野への広がりから、新たに策定される条文や宣言等の国際人権文書に明文規定として取り入れられていく（元, 2021）。女性差別撤廃委員会（CEDAW）の「締約国の中核的義務（2条）に関する一般的勧告第28号（2010）」では、複合差別が締約国の一般的義務の範囲を理解するための基礎的概念であると位置づけられている（三成, 2021）。

日本で交差性の概念は、在日コリアン女性（朴, 2016、鄭, 2020）や部落女性（熊本, 2020）の研究、さらにブラック・フェミニズムの流れを汲む反抑圧実践のソーシャルワークでも取り入れられてきている（児島, 2018, 2019）。

2010年第三次男女共同参画基本計画において「障害があること、日本で働き生活する外国人であること、アイヌの人々であること、同和問題等に加え、女性であることからくる複合的に困難な状況に置かれている人々」という文言が明記された。その後、2014年に批准した障害者権利条約では、第6条2項第1に「締約国は、障害のある女子が複合的な差別を受けていることを認識するものとし、この点に関し、障害のある女子が全ての人権及び基本的自由を完全かつ平等に享有することを確保するための措置をとる。」と提言された。2015年第四次男女参画基本計画には、「複合差別」や「インターセクショナルリティ」の概念が継承され（熊本, 2020）、障害者、高齢者、外国籍といった属性に配慮しながら支援する具体的なあり方が検討されている。

上野（1996）は複合差別を、「多元差別のうち、差別相互の関係にねじれや逆転があるものをさす」とし、重複差別「複数の差別が重層化し、蓄積している状態」と区別しているが、交差性の概念はこの両者を含意するものとする。この定義を障害のある在日女性に置き換えれば、「在日社会の中での自民族差別」、「在日社会の中での性差別」、「日本社会での民族差別」、「日本社会での性差別」（鄭, 2020）、「在日社会での障害者差別」、「日本社会での障害者差別」等、複数の差別が複雑に絡み合った状況が姿を現す。このように交差性は、複数のアイデンティティの交差や差別を見据え、個人が置かれている立場のみならず、差別を生み出す社会全体の構造のなかで差別をみていくこと（熊本, 2003）、社会的立場の違いを生み出すプロセスやダイナミズムを捉えられること（飯野, 2021）に意義があると言える。

また交差性は、アイデンティティとポジショナリティとの関連からみる必要がある。ポジショナリティとは、「所属する社会的集団や社会的属性がもたらす利害関係に関わる政治的な位置性」（池田, 2016）である。複合的アイデンティティは、時に「自分は何者なのか」を想起させ、社会的権力に左右され、ポジショナリティに揺れる。つまり、個人の主体的選択や志向以前に、半ばアイデンティティを決定されかねない権力作用

への抵抗を試みる（鄭, 2005）。権力の不平等性を捉えるためには、ポジショナリティを「誰が、何（誰）に向かって、誰を、何にアイデンティファイするのか」から問うことが重要である（鄭, 1996）。

以上を踏まえ、障害のある在日女性の社会的な位置づけ、その経験を理解するうえでは、交差性という概念が有効であると考えられる。Kuran et al. (2020) は、ある集団に属する個人は、さまざまな抑圧的影響を受け脆弱性や不可視化されやすい特質をもつゆえ、交差性は集団内の個人の均質化を回避するのに有効であると指摘している。

## 2.2 障害とエスニシティ

ミネソタ州での研究によると、障害のある有色人種には複数の文化的アイデンティティやコミュニケーションの障壁、障害に対する文化の違い、孤立と恥辱、サービスに関する知識の欠如、文化的背景を考慮したサービスの欠如等の問題が多岐にわたる（Lightfoot & Williams, 2009）。

一方在日コミュニティにおいては、社会保障の分野で老齢年金問題と障害年金問題が残る。在日の高齢者は、日本人高齢者と比べて介護保険サービスの利用不安度が高い（木下, 2016）。介護保険サービスは無年金と経済状況等に有意な関連があり、必要なサービスを抑制する傾向にある（李, 2007）。1982年日本政府が、難民の地位に関する条約に批准したことを受け、在日外国人は国民年金への加入が可能となった。しかし当時20歳を超えた在日障害者には経過措置がとられず、現在も障害基礎年金（旧障害福祉年金）の受給はなく無年金状態のままである。

## 2.3 エスニシティとジェンダー

アフリカ系アメリカ人女性は、奴隷制に置かれた歴史的背景から、低賃金労働者として搾取されてきた。また女性の役割が妻と母親に限定された伝統的な白人家族の理想とは相反し、白人の女性らしさの基準に合わせられず嘲笑の対象とされてきた。彼女たちに対する社会的固定観念は、差別のある苛酷な社会に耐えることのできる「強い黒人の女性」像であり、コミュニティでの献身やケア、育児、無私であること、身体的にも感情的にも自立していることが美德とされてきた（Miles, 2019）。

在日コミュニティでも社会的文脈から、儒教の「内外観」により在日女性は家事育児、介護の面で嫁や妻、母親役割を期待され強要されてきた（李, 2021）。儒教的価値観の強さは、自らを軽視する内面化（鄭, 1996）や女性の健康に影響を及ぼしている（Koh & Matsuo, 2018）。

## 2.4 障害とジェンダー

障害のある女性は、不適切な母親としてステレオタイプ化されやすい。また社会的排除や社会活動への参加が制限され、家庭内で抑圧を受けるリスクが高い（Bradbury-Jones et al., 2015）。このような閉鎖的空間から自由を勝ち取るには、生存権を主張する強い決意が必要となる。日本では1970年代、障害者の自立生活運動が展開された。障害のある女性は、自分たちの子どもによる介助の問題性、社会的規範に縛られる女性役割や母親役割、セクシュアリティやリプロダクティブヘルスの問題を明らかにし、権利回復を求めてきた（瀬山, 2014、加納, 2018）。しかし一方で、障害のある在日女性に関する研究は金（1996）や李（2009）の自叙伝やそれに関連する論説以外ほとんどみられない。

## 2.5 障害とエスニシティとジェンダー

障害のある有色人種の女性は、法制度における差別、社会資源の不平等、貧困、住宅や雇用の問題、社会的

固定観念やスティグマ等による抑圧のフラストレーションを抱えやすく、自身が人種差別、性差別、障害者差別、これらの差別を経験しているかどうかにかかわらず悩み疲弊しやすい（Lightfoot & Williams, 2009）。

### 3. 研究方法

本研究では、金（1996）を、KJ法（川喜田, 1967）を参考にして質的に分析する。本手法は、質的データから、新しい意味体系を作り出すことに適しているからである（田垣, 2019）。以下の手続に沿って、そのライフヒストリーを再構成した。

まず、テキストデータ（PP.1-218）の内容を「障害をA」、「エスニシティをB」、「ジェンダーをC」と3つの単一カテゴリーに分け、社会的抑圧や心理的葛藤について触れる2-3個程度のセンテンスを1つのコードにした。続いて、関連するコードをグルーピングし見出しをつけた。そして、単一カテゴリーで抽出されたコードが、他の単一カテゴリーと重複するか検討し、妥当なものを「交差性」に位置づけた。具体的には「障害とエスニシティをD」、「エスニシティとジェンダーをE」、「障害とジェンダーをF」に分け、意味的にひとまとまりになる2-3個程度のセンテンスをコードにした。関連するコードをグルーピングし見出しをつけた。

### 4. 結果

単一カテゴリー、交差性の順（表1～表6）に説明し、表7については総じて考察で述べることにする。なお【】は大カテゴリー、〈〉は中カテゴリー、《》はエピソードからの引用を示す。

#### 4.1 単一カテゴリー

社会的抑圧や心理的葛藤について触れる2-3個程度のセンテンスを1つのコードにした結果、A=293個、B=26個、C=18個のコードが抽出された（表1、2、3）。

表1 A 障害への抑圧と葛藤

大カテゴリー	中カテゴリー	エピソード
【a 病院・施設生活が苛酷すぎる(51)】	〈治療は苦しい(2)〉	《前屈みに丸く寝かされ、何人ものおとなに取り押さえられるようにして注射を打たれる。日曜以外毎日毎日、来る日も来る日もその注射は休むことなく続き、そして私もそれを打たれるたびに、休むことなく声を限りに泣いた。(略)小さい子どもにとっては、じゅうぶん拷問のような日々だった(A12)》
	〈寒さと痛さ(9)〉	《暖房もなく、古い木造の八人の大部屋で、みな震えながら着替えをする(A44)》
	〈集団生活が辛い(3)〉	《施設での集団生活は、子ども心に本当に辛いものでしかなかった(A32)》
	〈家族と離れる寂しさ(13)〉	《『そんなら、帰るわな』と言って姉は立ち去る。私は一人取り残された寂しさで声を立てずに忍び泣く(A36)》
	〈常に諦める(5)〉	《私にインプットされている生活イメージは、〈阪大病院南二階2号室〉という自分の個室名と、〈ルンパール（注射治療）〉という言葉と、いつも看護婦さんが運んでくる〈ポボンス〉という黄色い液体の飲み薬に象徴されている。ともかくなされるがまましかたない、といった諦め的な感情が漂っている(A13)》
	〈人として扱われない(16)〉	《私にとって十年の施設生活を思うとき、やはり語らなければならないのは、当時の施設の不備のため、はじめはそう重度でもなかった子が、みるみる寂たきりになっていったり、死んでいったりする、そういう友達を目の当たりにしたことだ(A50)》
【b “治る”からの解放(6)】	〈いかに適応するかと必死(3)〉	《その環境にいかにうまく適応するかという幼いながらの知恵として、姉がわりになってくれる人を必死に作っていたのだ(A31)》
	〈治療への疑問をもつ(6)〉	《歩くための訓練を目的とした施設生活の中で、いわゆる「健康者」にいに近づけ、という努力のしかたに、私自身で終身符を打ったのである(A88)》
【c 障害は一括りにはできない(9)】	〈障害程度の進行や差異(8)〉	《徹頭徹尾人が障害の重い軽いでランクづけされ、それがその後の進路にもつながっていることを思い知らされていく過程であった(A80)》
	〈CP者と健常児(1)〉	《『CP者に健常児が生まれてくるのが一番の不幸である』というのがある。CP者の独特のペースをどう理解できない健常児として産まれれば、子どもは健康者の目で親を差別していく(A207)》
【d 修学や外出さえ阻まれる(20)】	〈自然に触れる機会の少なさ(4)〉	《七歳からずっと施設暮らしで、私はほとんど自然の樹とか草花とかを見たことがなかったのだ(A97)》
	〈修学することへの失望(8)〉	《中学のときに教師から言われた『おまえみたいな重度が勉強して何になる。それより、編み物でもなんでも手に職をつけて、たとえ一円でも自分の手で稼げるようになるのが、家族を安心させる道じゃないか』という言葉が騒々ける(A121)》
	〈学ぶ機会が乏しい(8)〉	《私たちは何でも、あらかじめ知識がなければだめだと思われているが、知識を習得する場そのものが我々障害者には閉ざされている(A281)》
【e 死への観念が身近にある(12)】	〈死に対する恐怖を抱く(3)〉	《私の恐怖には、暗闇の線と黒点の幻影に加えて、いつかは死ぬんだという概念が加わります(A21)》
	〈自殺の想像をする(2)〉	《死にたくなったら、どんな方法が残されているのだろうか？首を切る、にしても力があるだろうか。うそをついて睡眠薬を買ってきてもらって飲む、というのが一番だろうが、そんなにうまくいだろうか(A125)》
	〈身近な人の死(4)〉	《まだ若い職員が自殺した。(略)その日の日記にこんなことを書いている。『Kねえちゃん(職員)といいちちゃん(障)といい、死を選んだ人の心境は、第三者にはまったく想像もできないことばかりだ。(略)希望への道を断られたとき、私は死を選びたいと思っている』(A130)》
	〈死ぬために生きる決意(3)〉	《障害者になると、生と死の間をさまよったということがある。いわば私は、死の淵から生還しているわけである。いま障害者として生きている人たちは、皆そうなのだ。産まれ出るときも同じだが、その苦しさに次ぐ苦しさの中で、死の淵を覗きながら生きる方に戻ってきた何か、記憶の奥深くに息づいているに違いないという気がしてならない(A235)》

【f 家族の干渉が重い(22)】	〈介護してくれる家族の顔を窺う(7)〉	《重度になればなるほど、社会的責任から外されて、一生を親の扶養のもとにすごすと思われてきた。だから障害者はいつになっても子ども扱われる。それが障害者の内面の心理にも影響していて、(その頃の私自身の中にもあったのだが)介護してもらわなければならないこともあって、つい、健常者の顔を見て発言してしまったり、本音を言わないところがあるのだ(A152)》
	〈家族が自立を阻む(14)〉	《障害者はだいたい、健常者の家族の中で自分だけが障害者である場合が多い。そして、親兄弟は良くも悪くも家族の中に障害者がいることに「責任」を感じていて、心配のあまり、あるいは、「身内の恥」意識から、障害者を家に閉じ込められる(A154)》
	〈自立を心配する実母(1)〉	《「私に、運動のことを聞いてきたことがあった。私は本気でやろうとせずに、諦めたのだと答えたが、あれだけ運動を目的かたきしてきて親がボロボロ「運動はした方がいい」というようなことを言って、私を驚かせたのを覚えている。親としては私の状況が心配だったのだろう(A246)》
	〈運動に自覚める(11)〉	《親でもなく兄弟でもなく、(略)もしかしらここには何か、今の私の状況に対しての手がかりがあるかもしれない、という直観があった。とにかくその時の私は、本当に業をもつむ気持ちというか、砂漠で水を求める気持ちだったのだ(A133)》
	〈世間の評判を気にする(1)〉	《障害者をさらし者にしてとか、過激派とか急進組織とか、この運動に対する世間の評判は反発に満ちたものだった(A140)》
【g 運動に出会っても、やがて離れる(43)】	〈運動に対する距離感がある(13)〉	《私は「CP者でなくても、私のような重度の障害者はCP者と同じぐらい社会的迫害を受けているのに、青い芝はCP者以外入れないというのは、それも差別ではないか」。(略)この問題は、のちのちもずっとついてまわることになった(A151)》
	〈『やりたいことだけをやる』と決める(7)〉	《「決心したことがある。それは「本当に何かしたいことが自分の中から湧き上がってくるまで何もすまい」ということだった。気休めに何か飛びつくことだけはすまい。今の自分の落ち込みとつきり向き合うのだ(A233)》
	〈『私という一人称から始める』覚悟(2)〉	《「私たち」という複数形ではなく、「私」という一人称から始める必要はない。自分がそれまでに運動用語でいう「まだ解放されない障害者総体」の代弁者としての言葉しか持っていなかったか、ということを感じ知らされた(A220)》
	〈運動から離れた孤立感と不安(9)〉	《運動がなければ、組織がなければ、それほどまでに自分が無に帰する存在であったとは。私はそれをいやというほど思い知らされたのだ(A223)》
	〈施設や家族との同居は虚しい(4)〉	《その仕事にやりがいを感じているというのならともかく、面倒をみてもらっているのだから、と気兼ねしつづけて、私もこのぐらいはしている、と、ただアライバイをつくるだけの人生。そんな一生は人生を諦めろといわれているのと同じだ(A123)》
【h 自立生活への覚悟と不安(27)】	〈自立生活への覚悟を決める(13)〉	《親からの精神的な自立と、もっとそれを推し進めて、現実親の家から離れて自立生活に入ること、解放運動をしている者にとっては避けては通れない道であった(A159)》
	〈自立生活を始める(6)〉	《障害者が不動産屋に行ってもまとも相手にされず、そんなことにかかるとは時間のロスだから「それより健常者名義で借りてしまえ(これも会議で分担がきまつた)」ということ、その時は一度も自分で不動産屋まわりをしていない(A181)》
	〈施設に連れ戻される心配(4)〉	《その日たまたま介護者がいなくて一人家にいたとする。そこへ救急車でも来て、「さっ、病院へ行きましょ」と言われて連れて行かれても、周りがその人つきあいがなく、ただ障害者がいるとしか見ていなければ、どこか具合でも悪くなったんだろうと気にもしないだろう(A241)》
	〈ボランティアへの冷めた目線(1)〉	《私は実は大のボランティア嫌いだ。たまた施設に来るボランティアたちは、たいてい小さい子どもを相手にして、私たち年長の者の所へはめったにはよりつかず、遠巻きにしてお茶をのこして帰るといのがせきのやまだった(A132)》
	〈生きるために必要な存在(11)〉	《介護の必要な障害者にとって、介護の時間に連れられるというのは、それまで何もできない(トイレにさえいけいない)ということなので、致命的である(A185)》
【i 介護者との関係に揺れる(19)】	〈『運動しない障害者は、健常者にとって価値がない』(1)〉	《今までいかに介護を、私たち障害者のアジェンダにももたせていたか気づいた。アジれない障害者、運動をしない障害者は、健常者にとって価値がないのだ。だから介護に行く必要がある、ということなのだろう(A228)》
	〈ありのままの姿を健常者を選んでもらう立場(3)〉	《本当に介護が来ない日もあるかもしれない。ただ自分一人、他に正当化できるものは何もなく、自分の生きざまをさらす。それを選んでもらう立場(3)》
	〈介護者から逃げたい(1)〉	《(このころは介護者との関係がしんどかった時期でもあった。障らうとしても言葉をなくした状況で、いくら喋らなくてもいいと思おうとしても、やはり二人で向き合われることは気詰まりで、そこから逃げようとしていたのかもしれない(A254)》
	〈介護者の意に反して、したいことをする(2)〉	《『自分のやりたいことだけをやる』と決めても、重度障害者にはずっとついてまわる。他人である介護者との折り合い、どこまでいっても堂々巡りなのだが、私はその時、あることをどうしても必要としている者のエゴの方が優先される、それしかしょうがないではないかと、ふっ切れた(A257)》
	〈社会生活の障壁を実感する(5)〉	《重度障害者には世の中のハードルがすべて障害のところで引っかかってくる、というのがはっきり身をもってわかった(A103)》
【j 障壁となる社会制度に怒りをもつ(18)】	〈社会政策や司法への嘆き(2)〉	《『「不良な子孫」なのだから法律が墮ろすことを認める胎児や遺伝子、それが、社会にとって役に立たない障害者の命というわけだ(A149)》
	〈介護制度が未整備(5)〉	《私のような重度の身体障害者が、肉親ではなく他人による二十四時間の介護体制に支えられて一般の社会で生活するというのは、もちろん一般的にも、運動にとってもほとんど前例がないことだった(A183)》
	〈『坐り込みも辞さない覚悟』で施設に抗議(2)〉	《彼の死に、障害者を追い詰める施設政策の縮図をみるようだった。これをそのままにはおけない、施設に対し直接行動を取ろう、ということになり、坐り込みも辞さない覚悟で施設に話し合いを求めに行くことになった(A198)》
	〈役所に対する不満と交渉(4)〉	《社会的に弱い立場にある者の生命の危機の訴えが、それを受け止める責任がある行政の、窓口業務にあたる一人の単なる怠慢でひねりをふっされてしまった。(略)これが障害者の自立生活の現実かと、私たちは怒りに燃えた(A291)》
	〈障害者としての自覚(5)〉	《私は三歳の時に突然、小児マヒに罹り障害児になった。(略)しかし、私にとってはここから私としての自意識のある人生である(A7)》
	〈責任を求められない立場(7)〉	《重度の障害者だと、取り調べられるのにも、留置所に入れられるのにも、介護がいる。警察が介護をさせて取り調べをするのでは、取り調べにならない。重度の障害者を法で罰しようとするは、よい手がかるのである。(略)取り調べ中にもしものことでもあれば、どう転んでも、世間の同情は障害者の方に向けられる。要するに、社会は障害者に責任を取ること求めているのだ(A204)》
【k 社会的な位置づけを模索する(28)】	〈健常者との境界線を感じる(8)〉	《「ふだん私たちは、障害者として一方的に社会からじろろ見られる立場にある(A285)》
	〈孤立しながらも自分らしく生きる(2)〉	《自分は自立してから産まれたようなもので、私の主体的な意識からすれば、その前の私の人生なんて数分でしかないような気がする。それだけ障害者の人生は奪われているということなのだ(A196)》
	〈『健常者社会にも障害者社会にも当てはまらない』私(6)〉	《私は健常者社会にも障害者社会にも当てはまらない難しい位置にいるのだ。そのことを私は、運動の挫折の中でいやというほど思い知らされた(A264)》
【l 固定的なイメージに反発する(3)】	〈頑張る姿が美しいとされる(3)〉	《国際障害者年というの是一般の人たちがコミュニケーションを取ってくるきっかけにはいいかもしれないが、肝心の、主人公である障害者に関してふりまかれているイメージが、あまりにも一面的すぎる。どうしてそんなに障害者が、清く正しく美しく、なければいけないんだ! (A273)》
【m 障害者の自立に対する社会への啓蒙(13)】	〈一人で社会に発信する覚悟(5)〉	《「駅で電車の乗り降りを手伝ってもらった人に、個人ビラを作って手渡すことにした。これが、私が一人になって初めて社会に対して発信したアプローチだった(A251)》
	〈『障害者の肉体それ自身が最大の表現』(8)〉	《しゃべれる障害、という自分自身の中途半端さ。それを乗り越え、自分をトータルに表現するためには、身体全体をのびのび使いたい(A279)》
	〈人間のエゴを知る(9)〉	《施設のこうした状況のまったなかで私が感じていたのは、「私は今、極限状況での人間のエゴという、人間の本质を見ているのだ」ということだった。そしてその本質は、自分の中にもあると思った。自分の中にも、いつのまにか職員のパクをかって、いばり排除される者に対して侮蔑心を持ってしまっている自分がいたのだ(A63)》
	〈自分の中の弱さや悪に向き合う(7)〉	《「ふだんからこの本音を見つめていかないと、人間として弱くなる、と思った。自分の中にも弱さや悪の部分がある。それに目をつぶって見ないふりをしていると、かえって知らず知らずのうちにその部分にひきずられてしまうのだ(A70)》
【n 内面化やエゴを内省する(21)】	〈施設生活が、生活経験のベースにある(1)〉	《施設ですごした十年は、私にとって大きな体験であり、私の人生はそれ抜きには考えられない。(略)七〜十七歳という、人間にとって最も感受性の強い時期を、私は丸ごと施設という特殊な空間の中ですごしたのである(A106)》
	〈内面化への気づき(2)〉	《私が幼い頃、「歩きたいやろ? 歩きたいと思わへんのか?」という言葉に、じつりと自分の本心を考える間もあたえられず、条件反射的に「うん」と答えさせられていたのに似て、「これは常識だ!」社会の通念だと押し寄せてくるものに対して、人は無防備にさせられているのだ。このことに気づき、怒りを持ったことが、私の生きる大きな力となった(A150)》
	〈傷心からの回復(2)〉	《自分の内面が現れてくる夢を、毎日順番に見るようになった。一番にでてきたのは運動の関係であった。(略)次にでてきたのが施設の関係で、これはかなり何度も繰り返してきたので、それが自分と与えている影響の大きさに改めて驚いたものだ。そして、旅の最後にやっとなど、そのときの現実の夢を見るようになる。すべてが旅の最後に帳尻が合うように、毎日鮮明な夢で、これによって私は自分の状態を洗い直しているように思った。不思議な体験だった(A266)》

注) CP者は脳性マヒ者のことをさす。中カテゴリーの ( ) 内はコード数、エピソードの ( ) はエピソード番号。以降の表においても同様とする。

表2 B エスニシティへの抑圧と葛藤

大カテゴリー	中カテゴリー	エピソード
[a 歴史からルーツをみる(9)]	〈実母は古典芸能家で日本語が苦手(4)〉	《母親は在日一世。いわゆる朝鮮半島から日本に渡ってきた朝鮮人である。だから日本語はたどたどしく、苦手だ。また、この人は朝鮮の古手(4)》
	〈植民地化政策に反対した実母の夫(1)〉	《日本の朝鮮植民地化政策に反対するために、朝鮮全土に広がっていた万歳運動を呼び出し、固城の村で演説をしたらしい。それが当局に知れることになり、村民を扇動したということで重刑を言い渡され、彼は投獄されてしまう。(略)一度政治犯というレッテルを貼られると、お家おとり演し、財産没収ということになる。そんなわけで結局、日本へ渡ってくるようになったそうである(B6)》
	〈北朝鮮への帰還事業で日本を去った同胞(1)〉	《北朝鮮に帰るといふ元劇団員が、最後にお別れにサックスを吹いて帰っていき、その後で母がしきりと、あのぐらいにサックスを巧く吹ける人は日本にはいないのにもったいないことだ、と嘆いていた(B7)》
	〈障害者運動と朝鮮独立運動を重ねて捉える実母(1)〉	《「おまえのやろうとしていることは、朝鮮が日本から独立しようとして、独立運動をしたのと同じ意味がある」。(略)私のやろうとしていることを一番理解している漢さは恐れ入る(B22)》
[b 社会から外されている(9)]	〈高圧的で権力的な警察は嫌いだ(2)〉	《警察が実家にも私のことを聞きに来た、と母親から聞かされた。私も母も在日朝鮮人一般の例に漏れず警察が嫌いだ。在日朝鮮人は、日本の朝鮮に対する侵略の歴史を、高圧的で権力的な警察の上にもみから(B23)》
	〈朝鮮人とは、秘密にするべきもの(4)〉	《自分の名前が正式名として「原田満里子」と記入されるのを見て、何か奇妙なものを見ていような気分になった。私は朝鮮人なのに日本の名前しかないのだ。朝鮮人ということはそういうことなのだと理屈抜きで剛り込まれた強烈な印象だった(B8)》
	〈朝鮮人と日本人に揺れる(3)〉	《私はべつに朝鮮人は嫌だなんて思っていない、ましてや日本人になりたいなんて言っていない(B18)》
[c 参政権を求めたい(4)]	〈「我が国」や法律に守られない(2)〉	《在日の立場は、日本の法律では守られていない存在なのだ(B24)》
	〈どうしても選挙権がほしい(4)〉	《国民の権利と教えられたものが私にはないという事実、奈落の底に突き落とされるような思いがした(B16)》
[d 本名を名乗りたい(4)]	〈本名を明かして生きたい(2)〉	《施設時代の友人にも自分の本名を明かし、これからは本名で通すと伝えた(B21)》
	〈在日の多くは出自を隠さざるを得ない(2)〉	《日本に住む大半の在日朝鮮人は日本名を名乗られている(B25)》

表3 C ジェンダーへの抑圧と葛藤

大カテゴリー	中カテゴリー	エピソード
[a 芸人の実母に近づけない(3)]	〈実母への寂しさや怖さを抱く(3)〉	《女であるとか人間であるとかよりも、芸人として一座の看板を担っていかなければならない生活だった(C4)》
[b 決められたことに抵抗する(7)]	〈女性への固定観念を疑う(2)〉	《女の子の場合には、歩けなくて車イスに乗ってはいれば致命的に相手にされない。これはひとつには、女の子の方が男の子に尽くすものだ、というスタイルがあったからだと思う(C12)》
	〈男女同室ではやりきれない(5)〉	《化粧とか宝飾とかに対してずっと拒否感があり、私にとってそれらは、寂しい虚栄の表裏返しでしかなかった(C6)》
	〈母としての覚悟(4)〉	《入ってみて驚いた。男の子も女の子もいっしょに同じ部屋に入れられている(C7)》
[c 母親になる覚悟と揺れ(8)]	〈子どもという抜き差しならない他人の意志を尊重しなければならない世界へも足を踏み入れていかねばならないのだ、と覚悟した(C17)〉	《子どもという抜き差しならない他人の意志を尊重しなければならない世界へも足を踏み入れていかねばならないのだ、と覚悟した(C17)》
	〈怖気づく思い(3)〉	《子どもを産んだ女には常に、おまえには母性本能がないのか、と責められるのではないかという強迫観念がある(C14)》
	〈育児と劇団を同時にやるか(1)〉	《子を産み育てながらまだ劇団を続けることが可能かどうか、皆目見当がつかなかった(C18)》

(a) 表1 「A 障害」

[病院・施設生活での過程]

十代は〈家族と離れる寂しさ〉、障害者が〈人として扱われない〉場面に幾度と遭遇する。いつしか〈常に諦める〉思考を巡らしながらも、その環境に〈いかに適応するかと必死〉になる姿が描かれる。そんな中、健常者に近づくための訓練や〈治療への疑問をもつ〉ようになり、やがて【A-b“治る”からの解放】を獲得していく。また〈障害程度の進行や差異〉によって周囲からの対応や進路が決まっていくことを知り、【A-c障害は一括りにはできない】という実感をもつ。幼少期に生死の間をさまよった体験により《いつかは死ぬんだ》という概念が想起され、幻覚となり周期的に彼女を襲う。

[家族との関係性]

退院後は【A-f家族の干渉が重い】と語る時期が概ね三期に分けられる。高校探しの送迎などで〈介護してくれる家族の顔色を窺う〉時期、〈家族が自立を阻む〉時期、運動を離れ実母が娘の〈自立を心配する〉時期であり、出来事のなかで家族の関係性が変化する。

[自立生活での過程]

運動に出会ってから〈自立生活への覚悟を決める〉。その思いは〈施設や家族との同居は虚し(い)〉く、《人生を諦めるといわれているのと同じ》だと訴えるほどであった。念願の自立生活が実現するも、絶えず〈施設に連れ戻される心配〉を抱えていた。それは同時に〈健常者との境界線を感じ(る)〉たり、障害者が社会から〈責任を求められない立場〉に置かれている現実を知ることでもあった。〈孤立しながらも自分らしく

生きる）ことを優先に、〈『健常者社会にも障害者社会にも当てはまらない』私〉の【A-k社会的な位置づけを模索】していく。

[運動への疑念]

〈運動に対する距離感〉が芽生え始める。それは《私のような重度の障害者はCP者と同じくらい社会的迫害を受けているのに、青い芝はCP者以外入れないというのは、それも差別ではないか》という疑念や個人を顧みず、言語に頼らざるを得ない組織への葛藤と自己矛盾であった。

[介護者との関係]

関係性に揺れ、反芻し続けた先に、〈介護者の意に反して、したいことをする〉と決め、ありのままの私を貫いていくスタイルを獲得していく。

[個人で社会に発信する]

〈頑張る姿が美しいとされる〉障害者への【A-l固定的なイメージに反発する】。やがて《しゃべれる障害、という自分自身の中途半端さ。それを乗り越え、自分をトータルに表現するためには、身体全体をのびのび使いたい》と劇団を立ち上げる。彼女の身体表現には、自己への内省抜きには成立しない。〈人間のエゴを知る〉こと、〈自分の弱さや悪に向き合う〉姿勢を深め、引き受けていく。

(b) 表2 「B エスニシティ」

[歴史的背景にみる立ち位置]

実母は日本語がたどたどしい。運動を辞めた頃、警察が実家に本人のことを聞きに来た。彼女は《私も母も在日朝鮮人一般の例に漏れず警察が嫌いだ。在日朝鮮人は、日本の朝鮮に対する侵略の歴史を、高圧的で権力的な警察の上にもみるからだ》と語る。実母は、娘が日本の偉い学生たちから援助してもらって自立生活が成り立っていることを警察に伝える。実母の対応には、日本で生き抜くしなやかさと頑強さが備わって映る。

[日本社会に属することの意味を探る]

施設に入所する際、家族が書面に自分の名前を日本名で記入したことに衝撃を覚える。それを機に〈朝鮮人とは、秘密にするべきもの〉という概念が生まれていく。日本で出生しても〈“我が国”や法律に守られない〉存在であること、在日には参政権が付与されない現実を知り、【B-b社会から外されている】ということの痛みを覚える。朝鮮人か日本人かの属性はつきまとい、《私はべつに朝鮮人は嫌だなんて思っていない、ましてや日本人になりたいなんていってない》と揺れながら、属性から解放されたい胸中が語られた。

[本名で生きたい]

マイノリティは排他的、忌避的に置かれスティグマを受けやすい（Goffman, 1963 石黒訳 1983）。〈在日の多くは出自を隠さざるを得ない〉状況の中で、金満里氏は〈本名を明かして生きたい〉思いを強く表す。彼女にとって施設入所時は、本名を特定の人に明かすことは秘密を明かすことであり、信頼関係を構築する手段であった。

(c) 表3 「C ジェンダー」

〔芸人としての実母に抱く思い〕

〈実母への寂しさと怖さを抱く〉のは、実母が《芸人として一座の看板を担っていかねばならない生活》のため、仕事に重きを置かざるを得ない状況が窺われる。それが【C-a芸人の実母に近づけない】という距離感となって娘の内心に表れた。

〔固定観念に疑問をもつ〕

施設では《女の子の方が男の子に尽くすものだ》という固定観念を疑い、男の子も女の子もいっしょくたに同じ部屋に入れられて、カーテンのない中、排便も着替えもさせられる生活に〈男女同室ではやりきれない〉思いを抱いていた。

〔母親になるということ〕

身ごもること、それは《子どもという抜き差しならない他人の意志を尊重しなければならない世界へも足を踏み入れていかねばならないのだ、と覚悟》することでありながらも、一方で《子どもを産んだ女には常に、おまえには母性本能がないのか、と責められるのではないかという強迫観念》や《子を産み育てながらまだ劇団を続けることが可能かどうか》という不安が見受けられた。

4.2 交差性

表1から表3で整理したコードが他の単一要因と重複するか検討し、妥当なものを「交差性」に位置づけ、「障害とエスニシティをD」、「エスニシティとジェンダーをE」、「障害とジェンダーをF」として整理し、意味的にひとまとまりになる2-3個程度のセンテンスを1つのコードにした結果、D=18個、E=13個、F=28個のコードが抽出された（表4、5、6）。

(a) 表4 「D 障害とエスニシティ」

〔属性に揺れ、模索する〕

自分が置かれている社会的関係への問い、日本と韓国の中に位置する存在、運動をしていた時は、健常者と脳性マヒ者の間に位置する存在。さまざまな問いが錯綜し、どちらからも距離をもたざるを得ない『間性』というものを獲得していく。

表4 D 障害とエスニシティの交差性

大カテゴリー	中カテゴリー	エピソード
【a 属性に揺れる(6)】	〈アイデンティティを模索する(5)〉	《自分の社会的関係のようなものを、問い返したいと思っていたようだ。私の位置—それは、在日朝鮮人、つまり日本と韓国との中間に位置する存在であるということ。そして青い芝の混乱の中でも突きつけられた、自分が健常者と脳性マヒ者の間にいる、ということであった(D15)》
	〈障害者になってしまった(1)〉	《『おまえを、金紅珠の名前を継ぐ後継ぎにしたかった』という母親の言葉はどこか他人事のように、むしろその後、続く、「ところが障害者になってしまっただけ」の方が、自分はそのような存在なのか、と意識させられた(D18)》
【b 人生を見越し死を思う(3)】	〈姪の自殺にショックを受ける(3)〉	《私だってこのままいけば自殺しかない。ただその勇気があるかないか、それが私の問題だった。だからなおさら他人事ではなく、先を越されてしまったような気持ちになった(D3)》
【c 経済力が乏しい(1)】	〈社会保障から外される(1)〉	《自立障害者の生活は、経済的には基本的に生活保護が頼りである。その他に障害年金がある(私は韓国籍なのでもらえない)、この年金は収入とみなされて生活保護からさしひかれてしまう(D6)》
	〈警察への警戒(3)〉	《思い当たるのは、例の施設占拠の闘争の際、強制排除される時に警察が顔写真をパチパチ取っていたことだった。それにしても、それがこんなところまで行き渡るものか。私は背筋がぞっとする思いだった。そして、いま自分が置かれている立場を考えた時、その恐怖は二倍になった(D9)》
【d 冷たい視線を感じる(8)】	〈自立生活の基盤が危うい(2)〉	《例の警察の一件をきっかけにして感じはじめた、在日朝鮮人の障害者としての私の自立生活がいかに危うい基盤の上に成り立っているかという強い危機感があった(D14)》
	〈存在が消されるのかという恐怖を抱く(3)〉	《在日朝鮮人で、地域の片隅でひっそりと生きている、介護の必要な重度の障害者。つまりそれは、いつ間から聞へられるかわからない立場なんだ、という恐怖(D12)》

表5 E エスニシティとジェンダーの交差性

大カテゴリー	中カテゴリー	エピソード
【a 継承される抑圧を越えたい(9)】	〈家父長制の影響を受ける(6)〉	《母は十七歳で祖父の決めた男の人と結婚して、芸能の世界から引退(E3)》
	〈自分の人生を初めて選んだ実母(2)〉	《私が生まれる原因になる男性と知りあい、恋愛関係となるのである。(略)母はこの時、初めてまともな自分の意志で、自分の人生を積極的に選んだのではないだろうか。夫は祖父が選んだ相手だったし、いくら天才と言われても、芸の道もまた祖父が決めたものだったから(E7)》
	〈親に立ち向かう(1)〉	《幼い頃から親と離れて育ったせいか、親は威厳があり、敬うべきもの、という朝鮮の儒教精神の中で育てられたせいか、反抗期というものがあった。そんな私が、親に反発したのだ(E9)》
【b ステレオタイプは嫌だ(3)】	〈『男尊女卑には敏感』(1)〉	《男尊女卑には敏感で、男の子には「オマエ」と呼ばれて嬉しがっている女の子の気がしれなかった(E8)》
	〈女子は赤色の服という決めつけは嫌だ(2)〉	《小さい頃から親に赤系統の服ばかり着せられていて、嫌だと思っているが青を着る勇氣もない(E10)》
【c 言語の障壁を超えた実母の言動(1)】	〈実母が会いに来てくれた(1)〉	《自らも高齢のため入退院をくり返していたのに、杖をつきつき、ひょっこり見舞いに現われた。病院名は知らせてあったが(略)、母は日本語がうまくできないのだ。(略)いったいどうやって訪ねてくれたのか。だが、とにかく娘が心配で「一目会いたい」という一心のその姿を見た瞬間、初めての我が子を抱え、右往左往する親の苦勞の一端を味わっていた、その感情と重なって、張り詰めていたものが一気に噴き出し、私は泣き出してしまっていた(E12)》

表6 F 障害とジェンダーの交差性

大カテゴリー	中カテゴリー	エピソード
【a したいことができない(3)】	〈重度は応援団をやれない(3)〉	《『私ら重度でも嫌な競技に文句もいわず出ているのに、応援団が嫌やって！応援団を女がやるって、かっこいいやん。軽度にしなくていいのに女だからイヤなんて、なに賛成いうてんの。重度に対してのつらあてとしか思われへんわ』(F4)》
【b 子どももつことに対する逡巡(7)】	〈子どもをもつことへの後ろめたさ(1)〉	《子どもを作ることは、世間に入質を取られているような、借りを作ってしまったような、後ろめたさがついてまわる(F11)》
	〈子どもを逃げ道にしたいくない(6)〉	《組織を否定した障害者たちの間で、子作りに逃げ込むかのように出産ブームが起こりだしたのである。周りは私には理解できない事態へと進んで行き、私はただ、なすすべもないまま、たまたまにだけだった(F7)》
【c 健常者の意見が強い(2)】	〈健常者から未婚出産を批判される(1)〉	《世間はまだ障害者が結婚しないで自分の意志で子どもを産み育てることなんて認めない。そんなことをすると今までやってきた運動がつぶれる、という強固な反対が健常者から出された(F9)》
	〈入籍を強いる健常者(1)〉	《あの時強引に入籍させた健常者の発想がわからない。世の中に通用している習わし、あるいは制度とか秩序といったものは、いったんその型にはまりだすと、際限なく個人を侵食してくると思っている(F11)》
【d 『普通はこうだ』を疑う(4)】	〈結婚や子育てへの障壁(1)〉	《障害者は、子育ても、パートナーと住むことも、今でも実際には困難である。ましてその頃は今よりもっと「考えられないこと」であり、結婚も子育ても、すべて運動として打ち出さなければならぬ時代であった(F13)》
	〈規範への疑問(2)〉	《私は、いま世に在る、「普通はこうだ」とか「こうすべきだ」ということすべてに疑いを持っている。子どもを産む、ということはその中でも最たるもの(F17)》
【e 出産が怖い(5)】	〈社会からのラベリングによる重圧(1)〉	《障害者だから、とか、帝王切開だから、というそれまでに耳にした、母性を問う踏み絵のような言葉をかすめる(F22)》
	〈母体に対する医療行為への抵抗感(2)〉	《小さい頃から医療行為ばかり受けてきたのに、子どもができれば、また自らすすんで医者にかからなければならぬ。しかも命に関わるかもしれないのだ。(略)それが私が子どもが欲しくない一番の理由だったのだらうと思う(F15)》
	〈腕力のない体での授乳は一苦勞(1)〉	《腕の力のない私は、どう支えて赤ちゃんに母乳を飲ませるか、その方法を見つけないのが一苦勞(F21)》
【f 育児を干渉される(5)】	〈出産で障害が重くなるのではという不安(2)〉	《障害者の場合、出産が障害が重くなるきっかけになることも多い(F27)》
	〈個人生活をさらけだしてきたことへの迷い(1)〉	《生活は常に介護者と共にあるのだから自分の時間や持ち物に執着せず、個人の生活はすべてさらけ出す、「開け放して守らない」という生き方をつくってきていたのだが、子どもがそこに入ってくると、どうも勝手に違ってくるのだ(F23)》
	〈介護者を通さざるを得ない育児(4)〉	《介護者によっては、子育てについて別の意見を持っている場合もある。その現実の中で私は、常に介在する介護者という第三者の目を通して、自分を問わざるをえなくなっていた(F25)》
【g 子どもの『個』を守りたい(2)】	〈CP者の育児観に戸惑う(1)〉	《CP者のペースで抱きかかえられるより健常者のペースで抱かれるほうが赤ん坊もぐあいがいいから、赤ん坊が親であるCP者を選けるようになる、というのである。そのへんになると、もう私の理解を超えた話だった(F8)》
	〈他者と繋がる育児(1)〉	《劇団という組織と、介護者という他人、その両方と関わりながら、開かれた関係の中で同時に、子どもという『個』を守ることをやっていた(F28)》

〔人生を見越し死を思う〕

高校進学に失望していた頃、15歳の姪が焼身自殺をする。金満里氏はこの時《他人事ではなく、先を越されてしまったような気持ちになった》と語る。在日、同性、同世代といった位置を重ね将来を憂う。日本国内の外国人自殺者は韓国・朝鮮籍者が46.9%（105人）と約半数を占める（厚生労働省, 2019）。なかでも在日女性には日本全体の女性よりも高い傾向にある。自殺に追い込まれる理由として「日本社会における差別68.4%」、「経済的理由63.2%」が圧倒的に多い（金, 2022）。

〔経済力が乏しい〕

金満里氏が出生した1950年代は、在日の4分の3以上が失業者であり、生活保護受給者は1951年を100とすると日本人は88%減少したのに対して、在日は232%に増大し、ほぼ5人に1人が生活保護を受けていた（文, 1996）。1970年代日本は先進国として発展を遂げるが、《自立障害者の生活は、経済的には基本的に生活保護が頼り》であった。

〔冷たい視線を感じる〕

マイノリティへの偏見は自己に向かう苦悩となり（宮地, 2005）、生涯にわたりメンタルヘルスに影響をもたらす（黒川, 2006）。他者から【D-d冷たい視線を感じる】経験は外傷体験となり得る。金満里氏は介護者と帰宅途中、一人のお巡りがもう一人に「青い芝やで」と言う声を耳にする。この体験から《在日朝鮮人の障害者としての私の自立生活がいかに危うい基盤の上に成り立っているかという強い危機感》は、いつ〈存在が消されるのかという恐怖を抱く〉警戒心と脅威を増幅させた。他者の注視の下に置かれる状況は内面化の契機となりやすく、反省的な自己意識を強くする（折原, 1969）。とくに重度身体障害者は混淆性が外面的にあらわれやすいため、常時他者の視線から逃れにくい（金, 2017）。

#### (b) 表5 「E エスニシティとジェンダー」

〔継承される抑圧を越えたい〕

実母は結婚も仕事も家父長制の制約の中で生きた。儒教精神の影響を受けながらも、敬うべき親や性役割といった社会に通底する価値観に疑問を抱く。時代に抗い〈自分の人生を初めて選んだ実母〉への語りは、金満里氏に生き方の幅をもたらしたと思われる。

〔実母の姿から親としての苦労を重ねる〕

出産してすぐ老齢の実母が見舞いに現れた。彼女は《病院名は知らせてあったが、片言の日本語でいったいどうやって訪ねてこれたのか。娘が心配で「一目会いたい」という一心のその姿を見た瞬間、初めての我が子を抱え、右往左往する親の苦労の一端を味わっていた》と回想する。《その感情と重なって、張り詰めていたものが一気に噴き出し、私は泣き出してしまっていた》との語りは、初産という経験と例の少ない重度障害者の妊娠、出産がもたらす不安や恐れ、重圧を彷彿させる。混在するそれらの労苦が、言語的文化的障壁を乗り越えて生き抜いてきた実母の苦労と重なり、カタルシスを喚起する。病院の一室は、初めて親子三世代が対面する場となり、命のバトンが継承されていく。そのリアリティは実母が目前に姿を現したことで強化され、彼女の擦り切れた心身を浄化していく。

#### (c) 表6 「F 障害とジェンダー」

〔恋愛・結婚・出産における社会規範〕

女性のライフステージには恋愛・結婚・出産の社会規範が根深く、障害者が家庭をもつことの主体性が奪われてきた。この身体で愛されるのかといった自分の魅力への不安や、諦め、葛藤を抱えやすい（松波, 2005）。これらの背景には優生学的思想が深く関連している（飯野, 2020）。金満里氏も《障害者は、子育ても、パートナーと住むことも、実際には困難である》と語る。

〔健常者の意見が強い〕

健常者中心文化は、所属する運動内でも巻き起こった。妊娠した障害女性が、未婚で育てたいと希望した際《そんなことをすると今までやってきた運動がつぶれる、という強固な反対が健常者から出された》。金満里氏は、強引に入籍させた健常者に憤慨し、社会通念や制度、秩序というものは強調されすぎると、際限なく個人を侵食するのだと批判する。

〔子をもつことに対する逡巡〕

瀬山（2001）は、母親のみに子育ての責任を果たす社会的規範や、子育ての責任を担えない母親は子どもをもつべきではないとする母親規範が、介助を必要としながら出産する女性たちへの抑圧となっていると指摘する。【F-b子をもつことに対する逡巡】を重ねながら、『私は、いま世に在る、「普通はこうだ」とか「こうすべきだ」ということすべてに疑いを持っている。子どもを産む、ということはその中でも最たるものだ』と言って、結婚や子育ての【F-d『普通はこうだ』を疑う】姿勢を深めていく。

〔出産が怖い〕

妊娠期になると〈出産で障害が重くなるのでは〉、『腕の力のない私は、どう支えて赤ちゃんに母乳を飲ませるか』などと【F-e出産が怖い】という気持ちが顕在化する。妊娠、出産は、身体機能の低下が命の危険と直結する重度障害者にとって、生死を想起させる。妊娠期は、背骨の変形により胎児が育つスペースは狭く、周産期が進むと横隔膜が押され内臓や骨を圧迫して痛みを伴いやすい。伊是名（2019）は、「私と同じ障害のある妊婦さんの中には、呼吸が苦しくなったり、骨折してほぼベッドで寝たきりになる人もいた」と語る。

〔子どもの『個』を守りたい〕

24時間のヘルパー介護を要することは、障害者の生存がまさに他者（介護者）によって規定されざるを得ないことを意味する（池内, 2016）。金満里氏は、子どもを身ごもったことにより再び介護者に【F-f育児を干渉される】思いを抱くようになり、これまで〈個人生活をさらけだしてきたことへの迷い〉が生じ始める。そうしてゆくゆくは、介護者との間で育児観の相違に出くわすだろうと想像する。介護の必要な重度障害者は、〈介護者を通さざるを得ない育児〉を、否が応でも引き受けざるを得ない。

「障害とエスニシティとジェンダー」のすべてを含んだと考えられるセンテンスはG= 1個のみであった（表7）。

表7 G 障害とエスニシティとジェンダーの交差性

大カテゴリー	中カテゴリー	エピソード
【aマイノリティとマジョリティを併せ持った痛烈な思い(1)】	〈複数の社会的属性があることに気付く(1)〉	<p>《私は運動でも、二つの立場を経験したことになる。まず、被差別者として差別者を撃つ立場。そして次に、運動を辞めた裏切り者として、かつての仲間から糾弾される立場。そしてまた、運動の中で障害者にとつての“親の差別性”を訴え続けていた、差別される「子ども」の側だけに立った立場。そして親になった立場。加えて、ケアで経験した、経済大国日本の障害者という、貧しいアフリカに対して贖罪意識を持たされてしまう立場。「お前たちは日本という恵まれた国から来ているのだからこのぐらいいはそちらが縁のが当然。」何度も聞かされたその言葉は私を「これは翻せば、私が日本で在日として、また障害者としてやっていたことではないか」という痛烈な思いに立ちかえらせてくれた(G1)》</p>

5. 考察

交差性による抑圧経験を、「障害」、「エスニシティ」、「ジェンダー」を頂点とした三角形で図解できると考察する（図1）。よって各辺は、障害とエスニシティ、エスニシティとジェンダー、障害とジェンダーの交差性と位置づける。図形内には、頂点の三者関係を三辺の中に表記し、個人の置かれている社会

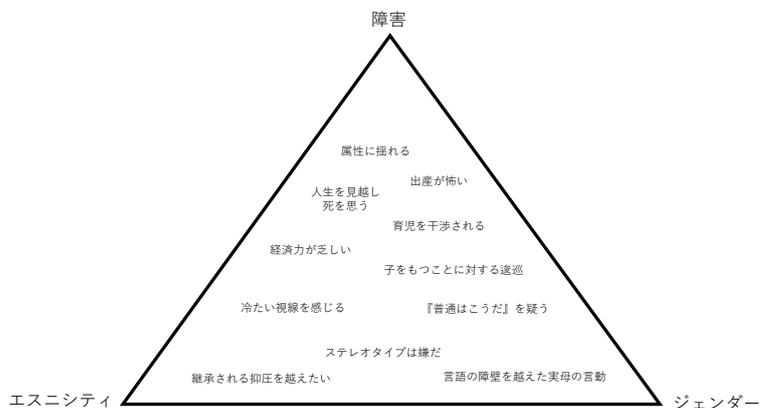


図1 交差性による抑圧の経験

的抑圧をリアルに浮かび上がらせた。

以下、1. 個人的な抑圧体験はどのようなプロセスを得たのか、2. 差別を生み出す社会構造とはどのようなものなのかについて図1とYoung（1990 飯田他訳 2020）による抑圧の5つの諸相に照らしながら検証していく。

### 5.1 個人的な抑圧体験のプロセス

アイデンティティは社会構築から付与され（鄭, 2005）、劣位のカテゴリーに属する者だけがアイデンティティの証明を強迫的に求められる（上野, 2005）。石川（1995）は「わたしのアイデンティティは、他者に委ねられ、翻弄され、支配される」と述べ、ポジショナリティとの関連を強調する。交差性は、権力の（構造的、規律的、文化的、人間関係的）領域を横断して分析し、あえてアイデンティティ・ポリティクスを前面に出すことで、個人のエンパワメントと集団のエンパワメントの間の連結を生起する（Collins & Bilge, 2020 小原・下地訳 2021）。

図1の〈属性に揺れる〉は、社会的属性が多くあるためアイデンティティの形成に複雑性が増し、「どこにも属せない、活かす場がない、守られていない不安感みたいなものがあったわけで…（金, 2000）」と錯綜した状態にもなる。複雑性には障害の中での差異、エスニシティやジェンダーの中での差異が顕在する。

彼女はそれらの差異に付加価値をつけ『間性（あいだせい）』と命名し、独自のアイデンティティを主体的に構成していく。そうすることで日本人か韓国人か、健常者か脳性マヒ者かの二元論を越えた脱構築的思考へと飛躍することを可能とした。金満里氏は『間性』を端的に「きっぱり白黒つけられないグレーゾーン」、「グラデーションの部分」とも表現し、その性質には「ナイーブかつ無限の豊かさ」や「変えてしまう結果だけじゃなくて、そのプロセス（倉田・金, 2014）」、「二者択一的なものは消え三者的発想になる。（金・崎山・細見, 1998）」と言い切る。

彼女がこの位置に着地した背景には、かつて「青い芝の会」の一員として障害者運動を担ってきた影響も大きいと考えられる。運動との出会いは、行き詰っていた問題が自己ではなく社会問題にあるとして、新たな掘り下げを与えてくれた唯一無二の場であった。この運動は、障害者が健常者に少しでも近づくことに異を唱え、社会変革を目指し、大きなうねりをもたらした。彼女はこの運動を通して、障害者コミュニティの有する価値観や連帯意識といった障害者アイデンティティ（田垣, 2022）を獲得してきたと推察する。

彼女は常に自己と向き合い、人間のエゴを主体的に受け止めていく。《私は運動でも、二つの立場を経験したことになる。まず、被差別者として差別者を撃つ立場。そして次に、運動を辞めた裏切り者として、かつての仲間から糾弾される立場。そしてまた、運動の中で障害者にとっての「親の差別性」を訴え続けていた、差別される「子ども」の側だけに立った立場。そして親になった立場。加えて、ケニアで経験した、経済大国日本の障害者という、貧しいアフリカに対して贖罪意識を持たされてしまう立場。「お前たちは日本という恵まれた国から来ているのだからこのぐらいはそちらが譲るのが当然」何度も聞かされたその言葉は私を「これは翻せば、私が日本で在日として、また障害者としてやっていたことではないか」という痛烈な思いに立ちかえらせてくれた》。それはすでに自分が差別者として、権力者としての位置に立っているという事実と向き合うことでもあった。

Young（1990 飯田他訳 2020）によると、抑圧は、専制主義的な社会に起因するものではなく、民主主義社会の、自由かつ良心的な日常の実践において生じ、規範、習慣、シンボル、ルールなどの中に埋め込まれていることを指摘する。また抑圧の対象となる集団は、常に抑圧主体として存在する必要はなく、ある集団が別の集団に与える意図的な抑圧、という枠組みに必ずしも合致するとは限らないと述べる。このことから金満里氏

が常に抑圧される側に立たされるという固定的な状況はなくなると言える。加えてマジョリティ側へとポジショナリティを転換させることも起こり得る。彼女はポジショナリティの揺れに逡巡しながらも、人は傷つけ、傷つけられながら他者と生きること、その可能性を劇団の中に見ようとしていると語った。問い続ける道の延長線上に、劇団「態変」があり、障害者の存在を芸術にまで昇華させる身体表現の舞台がある。何より彼女は、交差性による抑圧の経験を、人間の本質を探求する姿勢に還元し主体的なアイデンティティを形成させていく。彼女は、交差性への気づきによって彼女自身の演技と人生そのものが豊かになることを知ったのである。

## 5.2 差別を生み出す社会構造

「搾取」は、資本主義社会における労働力に着眼し、権力側が地位や富の増強を目的に、持たざる者のエネルギーが枯渇し尽くされてしまう過程をさす。地位を低められた者の労働は補助的、道具的となりやすく、〈経済力が乏しい〉背景には、障害者雇用や年金などの不安定収入、国籍による就職差別などの問題が潜む。

「周辺化」は、他者に依存せざるを得ない者（高齢者、障害者、シングルマザー等）が、社会生活から疎外され心理的・物質的窮乏を抱える位置に置かれる状況をさす。資本主義社会の周辺化には、福祉を必要とすることで享受されるべき権利や自由が奪われる点、福祉サービスによる物質的援助を得られる反面、本来の能力を発揮する機会が奪われる点の二つの不正義があると説く。これらはポジショナリティやスティグマと関連し、〈属性に揺れる〉、〈冷たい視線を感じる〉、〈人生を見越し死を思う〉のカテゴリーと関連する。

「無力化」は、資本主義社会の階級による専門職と非専門職の位置づけから論じており、非専門職者は、発展的で進歩的な仕事に就く機会が乏しく、しばしば専門職の権威下に置かれる状態をさす。上記三つの抑圧はすべて、社会的分業を起因とする権力と抑圧の関係性にあり、ヘゲモニックな分割線で社会的なポジショニングが決定する（児島, 2019）。ゆえに〈経済力が乏しい〉、〈属性に揺れる〉、〈冷たい視線を感じる〉、〈人生を見越し死を思う〉、〈継承される抑圧を越えたい〉、〈『普通はこうだ』を疑う〉、〈子をもつことに対する逡巡〉、〈言語の障壁を越えた実母の言動〉など、さまざまなカテゴリーの様相を呈する。

「文化帝国主義」は、社会を支配する作用が、諸個人が帰属するコミュニティの特有さを不可視化すると同時に、その集団をステレオタイプ化し、他者として追いやる位置に置く。ここには他者化され、固定観念に晒されるという点ですべてのカテゴリーが照合されていく。

「暴力」は、危害や屈辱、不当に破壊すること。また何ら動機をもたないような、集団の人や財産に対する無差別で理由のない攻撃をさす。ある集団への暴力は、その集団にいる個人を間接的に攻撃することでもあり、日常的な恐怖は止まない。また暴力は文化帝国主義との交差であると説くことから、必然的に全カテゴリーが含有される。さいごに、図形内の各カテゴリーの性質は、はっきりとした境界はなく、往復可能で、連動するものもあればファジーな要素をもつ。それは金満里氏がポジショナリティの問いを、差異や多様性から発掘した『間性』の性質とも類似すると考える。抑圧の経験は固定されたものではなく動的であり、増幅もあれば軽減もあり得る。ゆえに各カテゴリーの性質は、グレーゾーンやグラデーション、ナイーブであり、変化のプロセスであると推察する。

## 6. 結論

本稿では、障害のある一人の在日女性のライフヒストリーを基に、交差性を用いて、社会的抑圧を可視化することを目的とした。金満里氏は、複数のアイデンティティに揺れながら自己を獲得し、取り戻していく。そのプロセスを通して、社会的蔑視や脅威、伝統的文化や社会規範による葛藤、経済的な困窮、障害者間の差異

や介護者との関係、妊娠・出産における身体機能の不安や母親になる覚悟など、さまざまな視点が浮かびだされた。さいごに、主体的なアイデンティティの獲得後も、権力者の位置にいる自己と対峙する彼女の姿から、我々は誰もが差別者になり得る位置にいることを自覚し、差別を生み出す社会構造の解体を目指す必要があることが示唆された。

今後は、本稿で扱えなかった身体障害以外の障害や、インタビューによる語りにも注目してインターセクショナリティの差異や多様性を検証し、交差性がどのような課題と、またどのような可能性をもつのかを明らかにしていきたい。

## 引用文献

- Bradbury-Jones. C., Breckenridge. J. P., Devaney. J., Kroll. T., Lazenbatt. A., & Taylor. J. (2015). Disabled women's experiences of accessing and utilising maternity services when they are affected by domestic abuse: A critical incident technique study. *BMC Pregnancy and Childbirth*, 15, 1-11.
- 鄭 暎恵 (1996). アイデンティティを超えて 井上 俊 (編) 差別と共生の社会学——岩波講座現代社会15—— (pp.1-33) 岩波書店
- 鄭 暎恵 (2005). 言語化されずに身体化された記憶と、複合的アイデンティティ 上野 千鶴子 (編) 脱アイデンティティ (pp.199-240) 勁草書房
- 鄭 幸子 (2020). 「あまりにも見事にくり返す」——災害とマイノリティ女性と複合差別—— 岡山大学全学教育学生支援機構教育研究紀要, 4, 60-68.
- Collins. P. H., Bilge. S. (2020). *Intersectionality* (2th ed.). Cambridge: Polity Press.
- (コリンズ, P. H.・ビルゲ, S. 小原 理乃・下地 ローレンス吉孝 (監訳) (2021). インターセクショナリティ 人文書院)
- Goffman. E. (1963). *Stigma: Notes on the management of spoiled identity*. London: Penguin.
- (ゴフマン, E. 石黒 毅 (訳) (1983). スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ—— せりか書房)
- 李 清美 (2009). 私はマイノリティあなたは？——難病をもつ「在日」自立「障害」者—— 現代書館
- 飯野 由里子 (2020). 「省略」に抗う——障害者の性の権利と交差性—— 思想, 1151, 52-69.
- 飯野 由里子 (2021). ジェンダーをめぐるキーワード インターセクショナリティ (交差性) ジェンダー史学, 17, 59-63.
- 池田 緑 (2016). ポジショナリティ・ポリティクス序説 慶應義塾大学法学研究会法學研究, 89(2), 317-341.
- 池内 靖子 (2016). 劇団態変の身体表現——金満里のからだとことばから—— 抗路, 2, 169-183.
- 石川 准 (1995). マイノリティの〈存在証明〉——「生きる様式」の社会学的研究—— 東京大学博士論文
- 伊是名 夏子 (2019). ママは身長100cm ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 加納 恵子 (2018). インタビュー被差別を自認している人が社会をよくしていく 解放出版社編, 753, 39-45.
- 川喜田 二郎 (1967). 発想法 中央公論社
- 金 満里 (1996). 生きることのはじまり 筑摩書房
- 金 満里・崎山 政毅・細見 和之 (1998). 瞬間のかたち——劇団「態変」の軌跡—— 現代思想, 26(2), 50-63.
- 金 満里 (2000). 亡き母を演じて、新しい境地に私は踏み込んだ——障害者による身体表現の劇団を率いて—— 婦人公論, 85(4), 170-173.

- 金 泰泳 (2017). 在日コリアンにおける複合的アイデンティティと精神障害——日韓の「ハーフ」で性的少数者である「男性」のライフヒストリーから—— 東洋大学人間科学総合研究所紀要, 19, 167-185.
- 金 泰泳 (2022). 在日コリアンの自殺予防に関する研究——アンケート調査の結果から—— 東洋大学社会学部紀要, 59(2), 157-166.
- 木下 麗子 (2016). 在日コリアン高齢者と日本人高齢者の社会福祉サービスの認知状況等に関する比較調査——外国籍住民の集住地域におけるCBPR—— 社会福祉学, 56(4), 37-51.
- Koh, C., Matsuo, H. (2018). Current status of sexual health in Korean mothers residing in Japan (Zainichi mothers). *American Journal of Nursing Science*, 7 (6), 210-217.
- 児島 亜紀子 (2018). ソーシャルワークにおけるフェミニスト・アプローチの展開——ポストモダンの転回を経て—— 女性学研究, 25, 27-51.
- 児島 亜紀子 (2019). 反抑圧ソーシャルワーク実践 (AOP) における交差概念の活用と批判的省察の意義をめぐって 女性学研究, 26, 19-38.
- 厚生労働省 (2019). 人口動態統計による自殺死亡数及び自殺死亡率. [https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/seikatsuhogo/jisatsu/jinkoudoutai-jisatsusyasu.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/jisatsu/jinkoudoutai-jisatsusyasu.html) (2022年 8 月 3 日)
- 熊本 理抄 (2003). ジェンダーと人種差別の「交差」=「複合差別」IMADR-JCマイノリティ女性に対する複合差別プロジェクトチーム (編) 現代世界と人権17マイノリティ女性の視点を政策に！社会に！——女性差別撤廃委員会審査を通して—— (pp.190-201) 反差別国際運動日本委員会
- 熊本 理抄 (2020). 被差別マイノリティ女性の抱える複合的な困難への支援 ヒューマンライツ, 383, 18-24.
- Kuran, C. H.A., Morsut, C., Kruke, B. I., Krüger, M., Segnestam, L., Orru, K., ...Torpan, S. (2020). Vulnerability and vulnerable groups from an intersectionality perspective. *International Journal of Disaster Risk Reduction*, 50, 1-8.
- 倉田 めば・金 満里 (2014). 受信機のように、楽器のように イマージュ, 59, 2-12.
- 黒川 洋治 (2006). 在日朝鮮・韓国人と日本の精神医療 批評社
- Langness, L. L., Frank, G. (1981). *Lives: An Anthropological Approach to Biography*. Californid: Chandler & Sharp. (ラングネス, L. L.・フランク, G. 米山 俊直・小林 多寿子 (訳) (1993)・ライフヒストリー研究入門——伝記への人類学的アプローチ—— ミネルヴァ書房)
- 李 錦純 (2007). 在日コリアン高齢者の介護保険サービス利用意向に関連する要因の分析 国際保健医療, 22 (2), 99-105.
- 李 月順 (2021). 在日コリアン女性であるということ——国籍、名前、女性—— 第3回在日コリアン女性実態調査——「子育て」「介護」「コロナと仕事」を中心に見えたもの——2020年12月～2021年4月実施 アプロ・未来を創造する在日コリアン女性ネットワーク, 68-73.
- Lightfoot, E., Williams, O. J. (2009). The intersection of disability, diversity, and domestic violence: Results of national focus groups. *Journal of aggression, Maltreatment and Trauma*, 18(2), 133-152.
- 松波 めぐみ (2005). 戦略、あるいは呪縛としてのロマンチックラブ・イデオロギー——障害女性とセクシュアリティの「間」に何があるのか—— 倉本 智明 (編) セクシュアリティの障害学 (pp.40-92) 明石書店
- Miles, A. L. (2019). African american women with disabilities, intersecting identities, and inequality. *Gender and Society*, 33(1), 41-63.
- 三成 美保 (2021). マイノリティの包括的権利保障に向けた法的アプローチ 日本労働研究雑誌, 735, 24-36.

- 宮地 尚子（2005）. ト라우マの医療人類学 みすず書房
- 元 百合子（2021）. ダーバン会議20年とマイノリティ女性に対する複合差別 解放出版社編, 814, 24-31.
- 文 京洙（1996）. 高度経済成長下の在日朝鮮人 李 進熙（編）「在日」はいま、——在日韓国・朝鮮人の戦後50年——（pp.27-43）青丘文化社
- 折原 浩（1969）. 危機における人間と学問——マージナル・マンの理論とウェーバー像の変貌—— 未来社刊
- 朴 君愛（2016）. 大阪府内在住の離婚し子育てをした在日コリアン女性（シングルマザー）へのインタビュー調査から見えてくる複合的差別の現状 近畿大学人権問題研究所紀要, 30, 93-116.
- 瀬山 紀子（2001）. 日本に於ける女性障害者運動の展開 1 ——70年代から80年代後半まで—— 女性学, 8, 30-47.
- 瀬山 紀子（2014）. 障害女性の複合差別の課題化はどこまで進んだか——障害者権利条約批准にむけた障害者基本法改正の議論を中心に—— 国際女性, 28, 11-21.
- 田垣 正晋（2019）. KJ法 サトウ タツヤ・春日 秀朗・神崎 真実（編）ワードマップ質的研究法マッピング（pp.52-58）新曜社
- 田垣 正晋（2022）. 障害者アイデンティティとは 大阪公立大学現代システム科学域教育福祉学類編集委員会（編）人生が輝くSDGs（pp.83-94）せせらぎ出版
- 田中 耕一郎（1998）. 障害者の生活史における普遍的問題と主観的社会構成に関する研究——3名の障害を持つ女性の自叙伝分析を通して—— 生活学論叢, 3, 3-18.
- 上野 千鶴子（1996）. 複合差別論 井上 俊（編）差別と共生の社会学——岩波講座現代社会学15——（pp.203-248）岩波書店
- 上野 千鶴子（2005）. 脱アイデンティティの理論 上野 千鶴子（編）脱アイデンティティ（pp.1-41）勁草書房
- やまだ ようこ（2000）. 人生を物語る——生成のライフストーリー—— ミネルヴァ書房
- やまだ ようこ（2007）. ライフストーリー・インタビュー やまだ ようこ（編）質的心理学の方法——語りを読みきく——（pp.124-143）新曜社
- Young, I. M. (1990). *Justice and the politics of difference*. New Jersey: Princeton University Press.  
（ヤング, I. M. 飯田 文雄・菊田 真司・田村 哲樹（監訳）（2020）. 正義と差異の政治 法政大学出版）

# **The experience of social oppression among zainichi women with physical disabilities: A qualitative analysis of the life history of based on intersectionality theory**

**Jiyeon Song**

Graduate student, Osaka Prefecture University

## **Abstract**

This study aimed to identify the social oppression experienced by disabled “Zainichi” or Korean residents women in Japan using intersectionality theory. The author qualitatively analyzed the autobiography of Ms. Kim Manri, a female Zainichi with a physical disability. The extracted codes were classified into several categories and grouped under four major themes: “disability and ethnicity,” “ethnicity and gender,” “disability and gender,” and “disability, ethnicity and gender.” “Disability and ethnicity” had four categories, including “being driven by her social attributes.” “Ethnicity and gender” had three categories, including “trying to overcome inherited oppression.” “Disability and gender” had seven categories, including “hesitant about having children.” Finally, “disability, ethnicity and gender” had one category, which was “sense of being both in the minority and majority.” Kim Manri formed a proactive identity, wavering between multiple attributes such as race, nationality, disability, and womanhood positioned by positionality. Her confrontation with the self in a position of power suggested that we are all in a status where we can become discriminators.

Key Words: physical disabilities, Korean residents in Japan, life history, qualitative research, intersectionality

受付：2022年8月31日

受理：2022年10月21日

